

摂食障害における思考過程に関する対象関係論的理解と介入：「原初的なわかること」の困難さとその必要性

石橋，大樹

<https://hdl.handle.net/2324/2236002>

出版情報：Kyushu University, 2018, 博士（心理学），課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏 名 : 石橋 大樹

論 文 名 : 摂食障害における思考過程に関する対象関係論的理解と介入

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、治療が困難とされる重篤な神経性やせ症（摂食障害）のクライアントに対する精神分析的な実践的なアプローチの工夫として「原初的なわかること」に注目する意義について、複数のクライアントとの面接過程を通して主として対象関係論の立場から検討及び考察を行った。

第1部では、重篤な摂食障害への対象関係論的なアプローチについての概念の整理と問題提起を行った。第1章においては、Freudから現代のKlein派における身体の位置づけと、身体と心の関連について概念を整理した。第2章では、複数の事例を通して、重篤な摂食障害における「わかること」と「食べること」の関連について検討するとともに、BionのコンテイングやK-linkの概念を発展させて、筆者は「わかること」よりもさらに原初的な水準にある「原初的なわかること」という概念を新たに提唱した。「原初的なわかること」とは、①対象と接触し、②受動的に与えられた良いものを取り入れながら、③対象を「良い－悪い」の性質で仕分けすることが可能となり、④さらに良い対象の取り入れを通して、コンテイナーを成長に向かわせる思考の原初的な段階と定義される。重篤な摂食障害事例は、「原初的なわかること」の困難さによって、心身に良いものを摂取する、すなわち、「食べること」が困難な状態になっていると仮定した。

第2部では、重篤な摂食障害事例における「原初的なわかること」を促進させるために必要な精神分析的治療設定と、そのクライアントの行動化との関連について「薄皮の自己愛」及び「薄皮の（心的）皮膚」という視点から検討を行った。第3章では、クライアントの激しい度重なる行動化と、その行動化のコンテイナーとなる安定した面接室の構造というマクロな視点から考察し、また第4章では、クライアントの原初的な行動化を寝椅子が原初的なコンテイナーとしての「皮膚」を担うというミクロな視点から考察を行った。「原初的なわかること」の困難さと心的痛みを緩和させるために、面接室がクライアントの行動化をコンテインし、寝椅子がクライアントの「薄い心的皮膚」を覆い、保護する原初的なコンテイナーとして機能すると考えた。

第3部では、コンテイナーとして常に安定した精神分析的治療設定においてはじめて可能となる重篤な摂食障害のクライアントとセラピストの交流を通して、「原初的なわかること」の変化についてクライアント、セラピスト双方の視点から検討した。第5章では、著者の最初の重篤な摂食障害事例の経験を提示し、クライアントの行動化や投影によるセラピストとして「わかること」、「原初的なわかること」の機能を有するコンテイナーについて叙述し、その限界についても考察を行った。第6章では、治療経過中のクライアントの夢の変化を通して、過食嘔吐や他者に対する過度な支配をもたらした食欲さの背景について抑うつ的な喪失の観点から考察した。

第7章では、本研究の対象とした7名の重篤な摂食障害事例の治療経過を総合的に考察した結果、「原初的なわかること」という視点が、「良い－悪い」の対象を区別できず、ことごとく対象を拒絶し、些細な心理的介入や心の変化に対しても強い怖れを抱いてしまう「薄皮の自己愛」を抱くクライアントに対して、セラピストが対象を仕分け、クライアントがそれを取り入れることが出来るように、不安を和らげる解釈を行うことを可能にすると示唆された。この知見は、最近の精神分析学で注目されるメンタライゼーションの理論と類似する点があり、摂食障害事例の心理的支援に対して有用と考えられた。